

## 十一 教を読む愚者

去年、「海辺の生活」をよいものにするために『森の生活』を学んだ。その文章に、H・D・ソローは、親しんだ西洋古典の語句をちりばめるだけでなく、また、中国古典の知恵ある言葉も、インド古代の幽玄な詩編も引く。インドの『ヴェーダ』はとりわけなじみがないので、影響されやすい蝶は、『バガヴァッド・ギーター』とさらに『ウパデーシャ・サーハスリー』を読むことになった。前者はバラモン教からヒンドゥー教へと収束したその中核的な考え方を表わし、後者は後世の学者がヒンドゥー教の教えを解き明かした教説集、ということである。読んでみると、つぎつぎに詩節をくりだす説教は、思想を少しづつ異なる言葉づかいで展開するもので、現代の哲学者のやり方で整理すれば、それほど多くの命題を含んでいるのではないようだ。しかし、その詩編は、言葉が広い意味を含みこみ、とても深い思想をたたえているように聞こえる。敵かな調子が、ソローには好ましく思われたのだろう。

つまりそれは「教」である。教といえば、園丁は浄土真宗の信者の家庭で育ったので、関心が仏教に向かわざるをえない。もっとも読んだのは、書物になっている『浄土三部

経』・『般若心経・金剛般若経』、中村元訳の三冊の『ブツダのことば』と、「世界の名著」に収録された『バラモン教・原始仏典』だけである。それに、仏教を論じた書、ナーガルジュナの『中論』、中国の『摩訶止観』と『臨濟録』、日本の親鸞の『教行信証』と道元の『正法眼蔵』が、飾りとして書棚にある。それでも、仏教とつきあわせてみたいと思ひ、中東に起源をもつユダヤ教・キリスト教・イスラーム教の『旧約聖書』の二、三篇と、『新約聖書』、『コーラン』を読み、キリスト教神学者アウグスティヌスの『告白』も聴いてみた。しかし園丁は、これらの経や論書を、僧のように手元に置いて思索するのではないし、信仰する人のようにおりに触れて誦して身を顧みるのでもない。ただ、今回ヒンドウの教えを読んで、これら世界宗教の教えと比較するように導かれた。ところが、もともとよく理解していない上に、すでにどれも記憶は薄れて、かすかに残っている感じを比べることしかできない。

古代のインドで、バラモン・ヒンドウ教とどのような差異をもつてゴータマ・シツダールタが現われたのか、もう少し知りたいと思った。そこで、『ブツダのことば』の一つ『スッタニパータ』を再読した。眼が弱っているので岩波文庫のワイド版を買ひ、新版に改まっていることを知る。中村元師が、世界中の研究者に対して自負を抱くほど註を付け

ている。寒に入つて作務の減つた園丁は拙く考える。

インド古代の思想的な風土で、バラモンたちの教説が『ヴェーダ』の詩編に集成された。その環境の中で、出家修行者ゴータマ・シッダールタは、思索をつきつめて独自の世界観・人間観に至る。『スッタニパータ』は、インドの精神風土に適合するように少し神秘的な場面を設定し、すでに宗教として崇拜の道へ進んでいることを示す。しかし、ゴータマの言葉は、宇宙を主宰する神に触れず、人間の身体だけでなく心に堅固で永続するものを認めない。あくまでこの現実世界にとどまり、人間が追求すべき理想を示すだけである。ここでは、人間社会での倫理的・道徳的な生き方を窮めることが重要になる。卑小な園丁は、説かれる究極の理想が世俗の人間には不可能で、修行者でも困難だろうと思つてしまふが、それでも、人間という存在の有有限さを見つめて、現実に出会う問題に根源的に立ち向かう姿勢を保つてということなのだろう。

『スッタニパータ』には、ヒンドゥー教の聖典『バガヴァッド・ギーター』と『ウパデーシヤ・サーハスリー』と重なる文章が多い。言葉づかひも似ている。人の在るべき姿勢を普遍的に語る言葉は、そう簡単には見い出せないということだろう。しかし、世界観・人間観に基本的な違いがある。ヒンドゥー教は、創造者に近い主宰者ブラフマンを定立し、各人に永続するアートマンが宿つていると考える。これに対して、ゴータマ・シッダール

夕は、現実世界から踏み出さない。言及しないということは、ブラフマンとアートマンを認めないということだろう。世界を仏教成立後の言葉でいう因縁生起する関係として観て、人間を永続しない者としてその中に置くのである。

それは、神秘主義から抜け出しているという点で、現代の人間が参考にして思索できる思想と言える。なぜなら、現代物理学は、宇宙を、実体的な構成要素が関数関係をむすびながら変遷する世界として捉えるのだから。もともと、両者の親和性を何か特別のはからいと観ることは正しくない。あくまで、精神あるいは心がなぜあるかという問題は、現実世界の彼岸にあるのである。それを人間の限界を超えて考えようとすれば失敗する。ゴータマは、踏みとどまって、よく生きることだけを説いているのだと思う。

この思想は、万能の創造神を基礎に置く中東起源の宗教と異なる。園丁は、『旧約聖書』と『コーラン』が他に勝る聖書だとは感じない。『新約聖書』には、愛を説く教説に多くの知恵を認めるけれども、創造神を信じる枠組みに同調できない。結局、ゴータマ・シツダールタの教えが世界と人間を思索するのに最も受け入れることのできる考え方だと思う。しかし、物理学をかじった園丁は、宗教としての仏教を信仰することはしない。

知りもしないことに首を突っこんで、こんな大それたことを書きとめるのは、賢明とは

言えないだろう。古い先短い愚者のすることである。信仰というものから見れば、一層その感は深い。世界宗教は、現実世界において同じような倫理的・道徳的な言動を勧める。それに従うことはあくまで大切なことである。さらに、よき信仰者を知れば、その信仰がどれほど人間を高めるかを教えられる。ところで、そういう人は、教を読んだりせず、教を誦して身を顧み、言動を慎む。この園丁のように教を読む者は愚者なのである。

それでも園丁は、信仰者ではなかった目覚めた人を思い浮かべる。ユダヤ教とキリスト教からつまはじきされたスピノザは、無信仰でも敬虔な人であった。人間の理性の限界を見定めて哲学したカントは、近代以後のよく生きることをめざす人間の鑑である。現代にもそういう賢者がいるだろう。

ここで取り上げなかった古代中国では、賢者は現実主義の下で思想を育んだ。園丁になっている蝶は、たとえば莊周のように思索することも意味があると思う。